続・歴史の扉を開く　番外編

# 戦争を知らない世代　日本政府の心を動かす
# 南樺太の歴史を記す二九六点の資料が国立公文書館へ保管される

青山大人（やまと）　衆議院議員

国会事務所に届くある会報誌上で、全国樺太連盟の解散の記事を見つけたのは昨年四月のことだった。祖父が健在のころ、定期的に機関誌が送られてきていたので、その名に見覚えがあった。

全国樺太連盟はシベリア抑留帰還者を支える互助組織である。記事によれば、高齢化に伴い会員数も激減し解散を決めたとある。戦後から七十年経過し、こうしてまた一つ戦争と現代をつなぐ証が社会から消えていく。何か自分に手伝えることはないか。

調べてみると、こうした団体が解散する際保有する歴史的資料の保管先に困るという。

思い立ったが吉日。行動の素早さは私の性分でもある。全国樺太連盟はまだ電話が通じていた。こちらの意を申し入れ、永田町の国会事務所からそう遠くはない六本木にあるその事務局へすぐさま訪問することになった。

衆議院外務委員会での私の質疑日が迫っていた。政府は全国樺太連盟の解散をどう考えるだろう。

## 南樺太の敷香警察署へ赴任した祖父

私の祖父は茨城県稲敷郡阿見町吉原の出身である。三男坊である祖父は、長男ではない自分が身を立てるには警察官になるしかないと考えたようだ。戦前、同郷出身の妻（私の祖母）を帯同して南樺太の敷香警察署へ赴任した。敷香町はソ連領の北樺太との国境付近にあった。祖父が写っている国境警備訓練の写真を見たことがある。仲間と一緒に





2019年5月、北方領土交流事業で国後島の日本人墓地を訪れる

雪山で身を低くして銃を構えているものだった。厳しい表情をしていたのが今でも印象に残っている。

ソ連軍は一九四五年の八月十五日の後に南下してきた。理屈など通用しない。祖母は七月末に生まれたばかりの赤子（私の父）を背負い、本土へ他の住民と共に逃げてきた。民間人を本土へ逃がす間、警察と日本軍は南下するソ連軍を食い止めるために抵抗した。祖父はそのままソ連軍へ捕えられ、十一年ものシベリア抑留の運命をたどることになる。

祖父は当時三十四歳になるところだった。三十代半ばから四十代半ばという、肉体的にも精神的にも本来充分な活力と様々な可能性がある時期に、すべてを奪われ、世界が一転した百鬼夜行の中を生きなくてはならなかったのは、想像を絶する。

一九五六年十二月二十六日に最後の引揚船・興安丸が舞鶴港へ祖父を乗せて還るまで、土浦市内で教員として生計を立てていた祖母と私の父は、いわゆるシングルマザーの家庭であった。十一年間父親不在の家庭に突如父親が帰ってきて、しかももはや戦後ではないと日本は一変して浮かれている。他の家庭と同様、様々な苦労や親子の確執もあっただろうと思う。

思いを馳せて何かが変わるわけではないが、自分が、祖父、父、と命をつないで生かされていること、今、国の政治に携わる仕事をさせて頂いていることは、きっと何か意味があるのだろうと思う。政治家の判断ミスによって、不

合理な思いを国民の皆様がするようなことはあっては決してならない。

## 引き取り先が見つからなかった二割の資料

全国樺太連盟の代表理事の辻氏から詳細を伺った。資料の八割はすでに北海道と稚内市に寄贈が決まっていた。樺太記念館等での活用が検討されているという。

しかし、まだ残された約二割の資料の引き取り先が見つからない。元住民の記憶による敷香町の一軒一軒苗字を付した再現地図、白黒写真のアルバム、書籍、抑留された樺太庁長官のソ連側取調べ記録の写し、樺太庁名義の各種資料までもあった。

民間で収集された、先の大戦にかかる貴重な資料は学術的にも歴史的にも重要である。が、団体が解散すれば散逸してしまう。しかも、地上戦のあった樺太について国による資料室等もないという。北方領土問題を身近に考える上でも、当時周辺地域に居住していた日本人がたどった歴史に触れる場を都内に設けておくことは有用なはずである。

余談だが、私は政府の北方領土交流事業で二〇一九年に国後島を訪問した。樺太に近い地をこの目で見たいというのも動機の一つである。その辺境の島にはロシア本土から軍関係者等が移住させられ、戦後七十年も経過した以上、次の世代が生まれて生活が根付いてしまっていた。このときの体験についてはまたの機会にぜひお話させて頂きたい。



2021年４月、六本木の全国樺太連盟本部で資料を見る筆者（左）



さて、衆議院外務委員会当日を迎えた。歴史的資料の公的保管の必要を提起する私に、内閣府、厚労省、総務省が代わるがわる答弁に立ち、いずれも、管轄ではないので、と拒んだ。縦割り行政による盥回（たらいまわ）しである。

茂木敏光外相（当時）もこれには苦笑気味で「ロシアンルーレットというつもりはないが、どこかがやると決めればいいだけだ。予算がかかるものでもなく、政府全体で検討していく」と前向きに理解を示してくれた。

資料保管先が決まり、全国樺太連盟の清算が完了したのはそれから半年余り後である。

その間衆議院は解散。対立候補が手段を選ばない捨て身の戦術（注：公選法違反である選挙期間中のインターネット個人広告配信など）を展開したことで、私は激戦を経験した。支援者の皆様の熱い想いが天に通じたか、どうにか国政にぐっと押し戻して頂き、まさに薄氷を踏む思いをした。

一方、政府は私の提言と外相の指示を元に、着々と公的保管に向けて動いてくれた。

全国樺太連盟から朗報が届いた。資料のうち二九六点が国立公文書館に保管されるという。全国樺太連盟の思いであった、都内での一般閲覧が可能となったのである。

## 戦争資料館に訪れていたアジア近隣国の人々

昭和の戦争。戦後の経済復興成長、そして現在。多くの先人が苦労をされてきた上に、今、生きている者はその恩恵を受けて、立っている。若手政治家が先の戦争を忘れないでいることは、一時の衝動や人々から注目されたいといった小人のエゴからではなく、国民の皆様に対する責任を指針にして行動していく上で大切だと思う。

コロナ禍で来場者が激減した戦争資料館は多い。沖縄の対馬丸記念館もその一つである。以前、訪問した際には思わず涙が出た。アジア近隣国からの観光客もコロナ前には多かったという。どの国籍であろうと、見る者に平和の意義を痛感させる施設である。コロナ禍で存続の危機に追いやられぬよう、私は政府支援を外務委員会で訴えたこともある。

私はまだ二期目だがこの度、外務委員会の数少ない理事に抜擢された。日本は島国の地の利があり地続きではどの国とも接しない。ややもすれば内側にひきこもり、現状が続くかのような幻想にとりつかれてしまう。言うまでもなく、これからの時代、近隣諸国との関係をより一層意識していかなければならない。

外交はその緊張の中、国民の皆様にとって最善は何かを常に探っていく必要がある。

冷静さと、謙虚に勉強を絶やさないこと、そして人の機微を知る心を常に、一方で、政治家である以上、夢や希望を持つ世界観を忘れないでいたい。